

[研究ノート]

カリスマ刷新運動 プロテスタントの伸展に抗うブラジル・カトリック教会

山田政信 (Masanobu YAMADA)

天理大学

はじめに

1990年代に入ってブラジルのカトリック教会はこれまで経験したことのなかった難しい局面を迎えた。ネオペンテコスタリズム¹の爆発的な伸展と、カトリック信者の激減である。

本稿は、ブラジルで近年活動が盛んなプロテスタント諸会派にカトリック教会が対抗する姿を、カトリック信者による「カリスマ刷新運動」²を事例に論じる。

1980年から2000年にかけてプロテスタント諸会派は爆発的な伸展を記録した。ブラジル国民全体に占めるプロテスタント信者の割合は、1980年に6.6%だったが、20年後には15.4%を記録した。その代表格といえるのがユニバーサ

ル教会 (Igreja Universal do Reino de Deus) である。同教団に代表されるネオペンテコスタリズムは、ブラジルが新自由主義経済政策を導入した1990年代にマスメディアの活用、民衆宗教の活性化、投機的な「繁栄の神学」などによって急成長した。1977年に生まれたユニバーサル教会は、わずか20年余りでプロテスタント諸会派の中でも第三番目の巨大教団へと成長し信者数210万人を数えるにいたった。

一方、1980年ごろからブラジルでは人々の「カトリック離れ」が目立つようになった。ブラジル地理統計院 (IBGE) の調査によれば、カトリック信者は1980年に国民の約90%だったが、2000年には約74%に減少している。この変化は信者の信仰生活に顕著に表れており、サンパウロ大司教区では1989年から96年の間に教会婚の数が半減し、堅信式を受ける若者は幼児洗礼の三分の一以下となった。また、信者の間で避妊が増加していると指摘されている (Souza 2001: 46)。この問題はエイズ予防との関連性を考慮に入れなければならないものの、伝統的な

¹ネオペンテコスタリズムは、ペンテコスタリズムの流れを汲む運動で、ブラジルでは1980年代から始まった。ペンテコスタリズムは、後述するように聖霊降臨を求めるキリスト教の宗教運動で、病人の癒し、悪魔祓い、奇跡の体験などの現世利益を説くところに特徴がある。詳しくは山田 (2004) を参照。

²原語は Charismatic Renewal (ポルトガル語は Renovação Carismática) であり、日本語では「カリスマ刷新」、「カリスマ運動」、「聖霊刷新運動」、または「カリスマ刷新運動」と訳されている。本稿では、活動の内容や目的を示す場合には「カリスマ刷新」、運動体として示す場合には「カリスマ刷新運動」と訳すことにする。

宗教的価値観にひずみが生じてきていることの一つの指標となりうる。

このような状況のなか、ユニバーサル教会の驚異的な発展をポジティブに捉え、学ぼうとする神父もいる。ブラジル司教会議のアントニオ・カルロス・フリッツォ神父 (Antônio Carlos Frizzo) は同教会の集会に何度も参加して、かつてカトリック教会がおこなっていたいくつかの儀礼を再開すべきであると考えた (Souza 2001: 47)。具体的な方法はろうそくやバラの花に祝福を捧げ、あるいは妊婦に祝福を捧げるといった、民衆に受け入れられやすい容易な救済儀礼である。呪術的な儀礼はブラジルの民衆の宗教意識に深く浸透しているが、カトリックの聖職者によって再評価される兆しが見えるようになったといえる。難しい典礼よりも具体的で容易に救済に結びつく宗教実践がブラジルのカトリック教会でも近年重んじられるようになってきた。そこで注目されるのが「カリスマ刷新運動」である。

「カリスマ刷新運動」は1967年、アメリカでカトリック信者の大学生らがプロテスタント信者の指導を仰ぎつつ、後述するような聖霊降誕を体験する運動として始まった。同じ第二バチカン公会議以降の運動でありながらも「解放の神学」とは異なり、プロテスタント諸教派と隣接するペンテコスタリズムの流れにある点で注目される。1969年にブラジルに伝えられ、1980年代に全国に広がった。1990年代にはテレビや新聞・雑誌のニュースに取り上げられるようになり、1994年には参加人数が380万人を数えるようになった (Prandi 1997: 32)。現在、この運動を代表する人物がマルセロ・ホッシ神父 (Marcelo Rossi) である。以下では、近年のブラジルにおけるプロテスタント諸会派の伸展とカトリック教会の展開とのかかわり、「解放の神学」から「カリスマ刷新運動」へとシフトする

カトリック教会の動向、そしてカリスマ刷新運動の展開についてマルセロ・ホッシ神父をとりあげて、今日のブラジル・カトリック教会の課題を考察する。

1. 「シュッチ・ナ・サンタ」事件：ユニバーサル教会とカトリック教会の聖なる戦い

1995年10月12日、ブラジルの守護聖人聖母アパレシーダの祝日に、ユニバーサル教会の一人の牧師が、同教会が所有するテレビ局ヘコルジ (Record)³の番組で、聖母像を蹴飛ばした⁴。ブラジル全国ネットのテレビ局グロボ (Globo) はこの事件を大きく取り上げ、同国の宗教界を揺り動かすこととなった。これは「シュッチ・ナ・サンタ (Chute na Santa、聖母像への蹴り)」と呼ばれ、ユニバーサル教会がその拡大した勢力を背景にカトリック教会という「伝統」に挑戦した事件として知られる。

ブラジルではほとんどの町の中心地区でユニバーサル教会を見かける。その多くは廃業した映画館、倉庫、銀行、店舗などを集会場に改装したもので、入口には、トレードマークの白い鳩が描かれた赤いハートが目立つ。また、ユニバーサル教会の知名度も極めて高い。しかし、ブラジル地理統計院のセンサスによれば同教会信者は全プロテスタント信者のうちの8%に過ぎない。ネオペンテコスタリズムの教団信者でも全国の15%程度である。さらにいうならば、プロテスタント人口内の8%という数値は、ブラ

³ ユニバーサル教会は1989年に、ブラジルで5番目の規模のテレビネットワーク・ヘコルジを4万5000ドルで買収した。支払われた資金がコロンビアの麻薬密売によるものだとの疑義もたれたり、信者からの献金を強要するとしてブラジルでは「いかがわしい宗教」だとみなされる傾向が強い。

⁴ ラテンアメリカには国や地域の守護聖人を定める習慣を持っているところが多いが、ブラジルではサンパウロ市とりオデジャネイロ市のほぼ中間にあるアパレシーダの聖母が国家の守護聖人として定められている。

ジル全人口の2%程度に過ぎない。したがって、ユニバーサル教会に代表されるネオペンテコスタリズムをブラジルの主要なプロテスタント会派の運動としてみなすことは難しく、ましてやブラジル人口の7割を占めるカトリック教会に正面から対峙するには規模が小さすぎる数字のように見える。にもかかわらず、ユニバーサル教会がブラジルの宗教界を騒がせ、政界や経済界においても社会的プレゼンスを高めていることを考慮したとき、受容者の数だけで影響力を判断できないことは明らかである。カトリック教会の伝統に根ざした宗教的規範や文化に転換を迫る新しい波のうねりとして、その存在を位置づけることが必要であろう。つまり、1990年代に活発化ようになった「カリスマ刷新運動」は、プロテスタント諸会派のこのような挑戦に対するカトリック教会からの対抗の現われだといえる。

キリスト教世界における対抗図式は、ローマ法王のブラジル訪問にも見て取れる。1997年10月、法王ヨハネ・パウロ二世が三度目のブラジル訪問を行なった⁵。リオデジャネイロ市フラメンゴ海岸の近くには200万もの人々が集まって巨大なミサが挙行された。その模様はテレビ局グローバルによってブラジル全土に放映された。法王の訪問に向けてリオデジャネイロ市ではさまざまな準備が進められてきた。訪問にかかる費用を経済的に支援した会社に対し、市当局が文化奨励法に基づいて免税の措置をとるほどであった。また、法王が訪問することになっていたカトリック教会の改築費用は市当局が負担した。ユニバーサル教会はこれに反発し、公金の不正支出だとして法的に訴えを起こしている。

⁵ 筆者はこの訪問がカトリック離れとプロテスタント教会の挑戦を阻止するためのカトリック教会側の抵抗の一つだとみなしている。

リオデジャネイロ市で生まれたユニバーサル教会は、1万1000人の座席を備える巨大な教会を同市郊外に建設した。「カリスマ刷新運動」のマルセロ・ホッシ神父の活動は、ユニバーサル教会の発展に敵対するかのよう全国規模で展開するようになっており、サンパウロ市内に10万人収容の巨大教会を建設するというプロジェクトを立てている⁶。以上の展開は、ユニバーサル教会に遅れをとるまいとするカトリック教会の焦りの現われのように思えてならない。

2. 「解放の神学」から「カリスマ刷新運動」へ
カトリック教会が民衆を巻き込んだ活動に配慮するようになったのは第二バチカン公会議以降である。「解放の神学」と「カリスマ刷新運動」は、その流れの中にある。「カリスマ刷新運動」の詳細は次節に譲り、ここではかつてラテンアメリカで脚光を浴びた「解放の神学」が衰退し、「カリスマ刷新運動」へとシフトするようになった背景と理由について述べておきたい。

ラテンアメリカでは1970年代末から80年代初頭にかけて、「解放の神学」に基づく生活基礎共同体が多く地域に開かれるようになった。これは、第二バチカン公会議の結果をうけて開かれたメデジン（1968年）とプエブラ（1979年）の両会議において、カトリック教会が民衆のための教会として自らを再定義し、社会正義実現にむけて積極的に参画しようとしたことによる。ブラジルの場合、1964年の軍事クーデターで軍政が布かれたが、軍部独裁の不正義に対抗するカトリック教会は生活基礎共同体を通じて声なき者を代弁しようとした。経済政策では輸入代替工業化による外資導入が進められたが、「解放の神学」の神学者らは、経済搾取をも

⁶ 2005年12月に建設予定だったが、2008年3月現在、完成したという情報を筆者は得ていない。

たらず資本主義体制とブルジョアジーを悪の根源、民衆の苦難の原因であるとみなした。そのため政府は、革新的で共産主義的であるというレッテルをはって彼らを危険視し、国外追放に処することさえあった。

その結果、生活基礎共同体は 1980 年代半ばに国内に 8 万カ所もあったにもかかわらず、期待された成果をもたらすには至らなかった。ブラジルの宗教社会学者ヘジナウド・プランジは生活基礎共同体が衰退した理由を次の 3 つにまとめている (Prandi 1997: 102-103)。(1) 法王主導のもとカトリック教会が保守勢力を優遇して反革新勢力の司教を命名し、「解放の神学」の神学者らの権限を制限したこと。(2) 東ヨーロッパの社会主義が崩壊したのち社会変革を目指す代替案が不在であること。(3) ネオペンテコスタリズムが活性化してカトリック以外の選択肢が増え、とりわけ低所得者層の信者がそちらに流れて行ったこと、の 3 つである。

彼の議論を踏まえれば、大衆のための社会変革の道が閉ざされた今日、救済は個人レベルの変革によって導かれるという方向に向かわざるを得ない。ペンテコスタリズムは個人が聖霊のバプテスマを授かることをひとつの救済のありかただと見做すが、このような個別的な信仰の重視は今日の社会状況に適合的だといえる。すなわち、筆者が別稿で論じたように、冷戦構造が解体したあとの新自由主義経済体制が主流となった社会において、ペンテコスタリズムは、個々人が個別的な欲求充足を目指すようになった現代人の心性と親和性を持っているのである (山田 2004)。カトリック教会の「カリスマ刷新運動」はペンテコスタリズムの流れの中にあるが、とすれば現代社会で「解放の神学」から「カリスマ刷新運動」へのシフトが生じやすいことが容易に理解できる。また、ブラジルのカ

表 1: 「解放の神学」と「カリスマ刷新運動」の差異

	「解放の神学」	カリスマ刷新運動
苦難の原因	構造的な要因	個人のエゴイズム
救済をもたらすもの	人的努力	イエス、聖霊
救済の方法	共同体レベルでの政治闘争	個人レベルでの祈り
救済の対象	社会問題(農地改革、土地所有の問題、人権)	個人の内面(霊的苦悩、精神性)、生活苦

トリック教会では「カリスマ刷新運動」に好意的な神学者が司教に任命されるなど、教会組織の変革がこの運動の発展を容易にしていたといえる。

「解放の神学」と「カリスマ刷新運動」の信仰面にかんする違いをまとめると上のようになる(表 1 参照)。これら二つの運動の大きな違いは前者が社会変革(社会的改革)にあったのにたいして、後者が個人の精神的な刷新(内的改革)にあることだろう。すなわち、「解放の神学」では社会構造を変革することを通じて苦難の原因としての貧困問題を解消しようとする。救済は人的努力によって得られると考えるのである。そこでは、救済活動は共同体レベルの政治闘争という色調を帯び、農地改革をはじめとする行動が要求される。一方、「カリスマ刷新運動」では、心のありようが問題であるとされる。自らのエゴを捨てて隣人愛を重んじ、祈りを通じて神の恩寵が奇跡という形でもたらされると考えるのである。

3. 「カリスマ刷新」の胎動と展開

1967 年にアメリカで始まった「カリスマ刷新」は、カトリックのペンテコスタリズム (Pentecostalismo Católico) と位置づけられ、聖霊降

臨運動 (pentecostal movement) の一つを成している。カトリック教会内部での信仰の一つのあり方だが、運動のきっかけを生んだのが聖霊降臨を指導したプロテスタント牧師や信者だったことから、祈りの形態は従来のカトリック信仰のありかたと異なっている。ミサに参集する人々はバンドの音楽に合わせて神・イエス・聖霊を讃える歌を大合唱し、時には涙を流しながら両手を天にかざして懇願する。このようなスタイルはプロテスタント会派のものとしてみなされることが多く、伝統的なカトリック教会の静かな祈りを求める人はこの運動に違和感や抵抗を覚えている。

そもそもキリスト教の教会は、イエスの復活と昇天に続くユダヤ教の祝祭日(ペンテコステ)に、約束された聖霊が降臨したことによって誕生したとされる。ペンテコスタリズムの誕生は聖霊降臨の体験を通じて教会の始点に立ちかえるという姿勢に由来し、それによって教会の刷新と活性化が目指される。キリスト教史において聖霊の働きの体験は途絶えなかったが、近代では20世紀初頭にアメリカのプロテスタント会派で聖霊降臨のブームが起こったことが重要である。ラテンアメリカに勢力を伸ばしているプロテスタント会派の多くはこの流れの延長線にあり、たとえばブラジルにおけるペンテコスタル系教会を代表するアセンブリー・オブ・ゴッド⁷の淵源もこの時代に生まれている。

聖霊降臨の体験は、「異言 (glossolalia)」によって示されることが特徴的である。キリスト教の神格は「神・神の子としてのイエス・聖霊」という三位一体で理解されるが、このうちの聖霊を個人的に実感することが聖霊降臨であり、その体験はまた「聖霊のパプテスマ」とも呼ばれ

る。聖書の使徒言行録に、信徒に聖霊が降りた時、常人には理解不能な言葉(異言)を語ったという記述があるが、ペンテコスタリズムに参加する熱心な信徒の中には、祈りの途中で異言を語るようになった体験を持つ者が少なくない。「聖霊のパプテスマ」を授かった証として、異言のほかに、癒しの力や聖霊のメッセージを伝える能力があるとされ、人々に現世における救済をもたらすと理解されている。このような能力は霊的賜物(カリスマ)とみなされることから、「カリスマ刷新」とは神によって与えられるカリスマを新たに取り入れるための信仰活動だといえる。

先述したように「カリスマ刷新運動」は、「解放の神学」と同様に、第二バチカン公会議の決議をもとに生まれた民衆に開かれた教会活動の一環だが、個人の内面の変革と社会変革という二つの活動では、目指すベクトルが逆向きであることは指摘したとおりである。「カリスマ刷新運動」の場合、関連の国際機関(International Catholic Charismatic Renewal Service)の公式ウェブ・サイト⁸には、その運動が、第二バチカン公会議で発表された会議文書の一つである『教会憲章』(Lumen Gentium)に基づくこと⁹、そして公会議が終了した1965年からそれほど時間を経ずして同運動が始まったことが記されている。つまり、「カリスマ刷新運動」がバチカン公会議の趣旨を継承し、それゆえ正統性があると主張しているのであろう。

「カリスマ刷新運動」のはじまりは、ペンシルバニア州のデュークヌ大学¹⁰で1967年2月17

⁸ <http://www.iccrs.org/portugu.htm> 最終アクセス日、2008年3月30日。

⁹ 『教会憲章』第1章4条には教会に聖霊を授かることの重要性が説かれている。

¹⁰ カトリック系の大学で正式名称を Duquesne University of the Holy Spirit という。

⁷ ブラジルでは Assembléia de Deus と称される。

日から19日にかけて行われたセミナーに求められる。セミナーが週末に行われたことから、この運動の誕生は「デューケヌの週末」と呼ばれている。セミナーでは、集まった25名のカトリック信徒の学生が次々と聖霊降臨を体験した。彼らのような体験を求める人々は「祈りのグループ」と呼ばれる集会を開くようになり、やがて各地に広がって大きな運動に発展していったのである。セミナーには2名の大学教員が加わっていたが、すでに彼らは監督派の教会で聖霊降臨を体験していた。長老派の女性信者もセミナーに参加した学生を指導していることから、第二バチカン公会議後のエキュメニカルな潮流の下で、プロテスタントの聖霊運動との自由な接触によって「カリスマ刷新運動」が誕生したという事情が理解できる(Mansfield 1992)。そのときの学生の一人、パッチ・ギャラガー・マンスフィールド(Patti Gallagher Mansfield)は、自らの聖霊降臨の体験について次のように語っている。

「土曜日の夜、私たちは友人の誕生パーティーをする計画を立てていました。でも、チャペルに行くように導かれ、聖霊のバプテスマと呼ばれる恵みを受けたのです。その受け方は一人一人違っていました。私は神様が本当に私たちのことを愛してくださっているという強い確信を持ちました。これまで大きな声で祈りを捧げるという勇氣はありませんでしたが、私の口から祈りが流れ出ていったのです。」¹¹

4. ブラジルにおける「カリスマ刷新運動」の展開

「カリスマ刷新運動」はアメリカの大学生を中心的なメンバーとして開始したが、ブラジルにおいても活動が開始した初期には似たような

展開を見せていた。というのも、中間層で学歴の高い人々の宗教運動として受容されたからである(Oliveira 1978: 29)。「カリスマ刷新運動」に関して比較的大規模に行なわれた1978年の調査では、圧倒的に中間層のメンバーが多かった。しかし、1990年代に入ると低所得者層にも広がった。

表2は、「カリスマ刷新運動」、生活基礎共同体(「解放の神学」、ペンテコスタル系プロテスタント会派の三つの宗教運動のメンバーについて属性ごとの比率(居住地、学歴、収入)を調査した結果である。これを見ると、まず居住地では、「カリスマ刷新運動」と生活基礎共同体はともに大都市周辺の中・小都市に圧倒的に多く(78.1%と79.4%)、ペンテコスタル系プロテスタント会派でも中小都市の割合が大都市圏を少

表2：宗派別の属性(居住地、学歴、収入)

	カトリック教会		プロテスタント会派
	カリスマ刷新運動	生活基礎共同体	ペンテコスタル派
居住地	%	%	%
大都市圏	21.9	20.6	42.2
中小都市	78.1	79.4	57.8
学歴	%	%	%
文盲	7.7	9.3	11.2
小・中学校	56.1	58.2	68.3
高校	27.4	23.8	17.6
大学	8.8	8.7	2.9
収入	%	%	%
2倍以下	21.8	28.0	33.3
2-5倍	26.4	26.5	23.3
5-10倍	19.5	15.7	16.2
10-20倍	13.7	12.1	8.7
20倍以上	8.5	5.9	3.6

注：収入の基準は最低賃金(月収約80ドル)。最低賃金の2倍以下を低所得者層、2-20倍を中間層、20倍以上を高所得者層とみなす。
出典：Prandi (2000: 164, 165) への引用にもとづいて筆者作成

¹¹ <http://www.igrejafoje.com.br/site/index2.php?pagina=revistas&id=7> 最終アクセス日、2008年3月30日。

し上回っている(57.8%)。次に学歴では、「カリスマ刷新運動」、生活基礎共同体、ペンテコスタル系という順で学歴の低い人々の割合が高くなっている。そして収入は学歴と比例する傾向があり、同様の順番で低所得者層の割合が増えていることがわかる。1990年代においても、これら3つの運動のなかで「カリスマ刷新運動」のメンバーには高学歴、高収入の信者の割合が比較的高いといえる。

ブラジル最初の「カリスマ刷新運動」は、1969年、サンパウロ市近郊のカンピーナス市にイエズス会士エドゥアルド・ドウエティ (Eduardo Dougherty) によって伝えられた。後にカシヨエラ・パウリスタ市でもジョナス・アビブ (Jonas Abib) 神父を中心に活動が活発化した。「カリスマ刷新運動」がやがて聖職者レベルで大規模に認知されるようになったのは、フェルナンド・フィゲイレド神父 (Fernando Figueiredo、サンパウロ司教区を統括するブラジル司教会議の南地区1の議長であり、サントアマロ司教を務める) が、同運動に理解を示すようになってからである。なお、後述するマルセロ・ホッシ神父は、フィゲイレド神父からの承認と支援を受けて全国規模のスター的存在へと成長した。さらに、サンパウロ大司教クラウディオ・ウメス神父 (Claudio Hummes) とリオデジャネイロ大司教エウジェニオ・サレス神父 (Eugênio Sales) も「カリスマ刷新運動」を支援するようになっていく。

「カリスマ刷新運動」は、法王パウロ6世によって1973年に承認されたものの、ブラジル司教会議からの公認は1994年まで得られなかった。この運動の正統性を疑問視して反対する神父の数こそ減少してはいるが、現在もなお、「解放の神学」者をはじめとしてこの運動を好意的に見ない神父も存在する。

ブラジル国内で「カリスマ刷新運動」が公認されるまで幾多の変遷を辿っているが、その経緯は次のとおりである。1982年、ブラジル司教会議の常任委員会を構成する司教らは、「カリスマ刷新運動」が伸展するにしたがって、その正統性について議論すべきだと考えた。異言を語り、癒しが強調されることで「カリスマ刷新運動」がプロテスタント諸会派と混同される恐れがあること、司教区において許可なしに独自の活動を行っている場合があること、教義的根拠なしに活動が行われていること、聖霊の働きのみを重視する傾向があること、などが彼らの念頭にあった (Carranza 2000: 132)。1985年、常任委員会は「カリスマ刷新運動」を研究するための特別委員会を設けることを決定し、その翌年には、運動のリーダーを加えて、教義と司牧¹²にかんする調査研究を開始することを決定した。これと並行して、反対派の動きも表面化した。たとえば、1987年、ポトゥカトゥ市の司教は、ブラジル司教会議で公認されていないことを理由に、同司教区における「カリスマ刷新運動の活動」を禁止した。

1993年には、特別委員会の意見をまとめた『ブラジルにおけるカリスマ刷新にかんする基礎調査』(Levantamento sobre a Renovação Carismática no Brasil)の結果が出された。司教の44%は運動を許可しようと答え、24%は無回答、許可しないが17%だった。異言にかんしては32%が認めないとし、42%が認めるものの慎重な態度が必要であるとした (Carranza 2000: 121)。そして翌1994年11月27日、ブラジル司教会議は『カトリック・カリスマ刷新にかんする司牧のための指導書』(Orientações Pastorais sobre a Renovação Carismática Católica)をとおしてこ

¹² 司牧 (pastoral) とは、聖職者が信者を教え導くことを意味する日本カトリック教会における訳語である。

の運動を公認するにいたったのである。

『指導書』の内容はブラジル司教会議が「カリスマ刷新運動」を一定の制限のもとに認めているという印象を与えることから、あくまでもプロテスタント系のペンテコスタリズム運動との混同を避けたいとするブラジル司教会議の意図が伺える¹³。また、「解放の神学」を唱える神学者をはじめ、この運動に批判的な神父がいることは先にも述べたとおりだが、批判的な神父は、その運動では基本的に一般信者のイニシアティブが重視されることを危険視している。運動メンバーは、神父の許可を得たうえで「祈りのグループ」を形成するが、彼らは独自に活動している場合がほとんどである。集団の自立性が強いために、やがてカトリック教団から離れ、ペンテコスタル系の独立教会が生まれたというケースも報告されている。たとえば、カンピーナス市では「カリスマ刷新運動」から「生きる御言葉キリスト教会 (Igreja Cristã Verbo Vivo)」が生まれ、地域のカトリック教会と軋轢を生んでいる (Carranza 2000: 134)。『基礎調査』では、神父がメンバーを「教化 (disciplinar)」、「統制 (controlar)」、「指導 (orientar)」すべきだとしており、上記のようなカトリック離反の事態が生まれることを危惧していることが伺える。

「カリスマ刷新運動」の成長は、個人的で自発的な受容によることもさることながら、ユニバーサル教会をはじめとするネオペンテコスタリズムの教会と同様、ラジオ・テレビ番組、雑

誌、新聞などのメディアによるマーケティング戦略によるところが大きい。特にサンパウロ市で注目を浴びるようになったマルセロ・ホッシ神父は、1990年代におけるこの運動の火付け役の一人だといえる。

5. マルセロ・ホッシ: 「カリスマ刷新運動」のポップスター

「奇跡を行うカトリック教会。カリスマ刷新運動がプロテスタント会派と同じ手法を使って病気を治し、ミサが人で賑わいをみせている」という見出しで、ブラジルの全国レベルの週刊誌『イストエ』は特集を組んだ¹⁴。そこで紹介されたのがマルセロ・ホッシ神父である。彼は1994年12月1日に27歳で、サントアマロ司教区にある教区教会の担当司祭に任ぜられた。その教会では、助祭の時から彼が歌って踊る陽気なミサを行なってきたことが有名になり、たくさんの人が集まるようになっていた。『オ・エスタード・デ・サンパウロ』紙は、マルセロ・ホッシ神父のことを「青い目をして少し癖毛、身長194センチで体重98キロ、コリンチャンスファンのエネルギッシュな青年」と評しており、堅苦しい神父のイメージとまったく違うことが強調されている¹⁵。体育教師だった彼は体躯のよさと得意の話術というカリスマ性で人々をひきつけ、「カトリック離れ」の防波堤になっているような印象を与える。さまざまなテレビ番組にも出演し、たとえば子供向けの有名な全国番組シューシャでは、彼が行なう「主のエアロピクス」の歌と踊りに子供たちもはしゃいでいる。彼のCDは数々のヒットチャートを生み出しており、さまざまな世代に受け入れられた

¹³ 『カリスマ刷新運動にかんする司牧活動のための指導書』では、次のように記されている。

(59項): カリスマ刷新運動の集会やその他の集会で救済を願う場合、奇跡を起こす聖霊あるいは魔術的な聖霊に頼っているかのようなカトリック教会の信仰実践にとって異質な行動をとってはならない。

(62項): 実際には、聖霊のはたらきと信者の熱心な祈りととの区別をつけることは難しいため、異言での祈りを奨励してはならない。また、通訳なしで異言を語ってはならない。

¹⁴ IstoÉ誌 (1997年12月24日)

¹⁵ O Estado de São Paulo 紙 (1997年12月14日, Carranza(2000:53) への引用)

カトリック界のポップスターだといえる¹⁶。

1997年、マルセロ・ホッシ神父の担当教会が600人収容の新たな礼拝場の建設を進めていたとき、既に5000人もの信者らが周囲の道路を埋め尽くしていたという(Souza 2001: 52)。ミサには近隣の地区からだけでなく、サンパウロ大都市圏のさまざまな町から人々が集まった。教会は、中産階級が住んでいるマンション群のなかに建っているが、ミサの様子がスピーカーによって大音響で流され、集まった人々を目当てに出店も立ち並ぶようになった。ミサ後に残されたゴミの山と騒音を迷惑がった住人は、署名を行って抗議するようになり、1998年以降、彼のミサは、教会から車で10分ほどの所にある廃業した元工場で行われるようになった。1999年、筆者がそこを訪れたときには、入口に大きな十字架が掲げてあるほか、外観からは宗教的な施設という印象を受けなかった。また、内部の柱には組立ラインを思わせる数字が書き残されており、きらびやかなカトリック教会のイメージとは非常にかけ離れたものだった。

しかし、そこには多い時で2万人が収容され、マルセロ・ホッシ神父の歌と踊りのショーを楽しむかのように信者(ファン)が集まっていた¹⁷。ある女性は、マルセロ神父のミサは彼が参加者と楽しく遊んでくれるところがいいのだ、と筆者に語ってくれた。ミサが終わったあと、聖水が入っていると思われるバケツの水を、別れを

¹⁶ 彼のようなスタイルのミサを行う若い神父は他にもおり、リオデジャネイロには、サーファーで気難しくない物言いだ定評のゼッカ神父がいる。

¹⁷ 現在、彼のミサは、毎週木曜日と土曜日に午前と午後2回行われている。彼はミサだけではなく、メガ・イベントで人を集めている。1997年11月2日の万霊節にモルンビサッカー場で彼が行った集会「Sou feliz porque sou católico(カトリック信者で幸せです)」は、10万人の参加者で溢れ、入りきれない人々が場外にも3万人集まっていた。マルセロ神父は、このようなメガ・イベントの火付け役はユニバーサル教会の創始者エジール・マセードだと語っている(Veja 誌1998年4月8日。http://veja.abril.com.br/080498/p_092.html)

惜しむ信者に対して舞台の上から撒き散らしている姿は、型破りで茶目っ気のある若さを感じさせた。

マルセロ・ホッシ神父の容姿やミサのスタイルが人気を集めていることは明らかだが、「カリスマ刷新運動」における宗教的な魅力にも注目すべきである。ペンテコスタリズムの流れに位置づけられる「カリスマ刷新運動」では、聖霊のバプテスマを授かることが重要な信仰実践のひとつであると理解している。それは、信者にとって聖なるものの直接的な体験である。こうした聖なるものの直接性は、ミサにおいても看取できる。ミサでは、聖体顕示台を高々と掲げた神父が寄り集う信者の中を歩いて行く。そのあいだ信者らは、あたかも聖体顕示台から放たれる光を受けるように、ろうそく、数珠、写真、塩、労働手帳などをかざしている。通常の教会のミサでは神父がそのような行進を行うことはなく、救済を願うためのさまざまな品物が信者から差し示されることも少ない。それだけに、「カリスマ刷新運動」のミサにおけるこのようなもっとも神聖な時間は、現世利益を願う信者たちが「聖なるもの」との直接的な接触を体験することのできる時間だといえる。

おわりに

マルセロ・ホッシ神父をはじめカトリック界のポップスターや「カリスマ刷新運動」にかかわる神父らが、「カトリック離れ」を阻止する力になっていることは事実だろう。バチカン公会議以降、教会は民衆に目を向けるようになったが、「解放の神学」が衰退したのち、「カリスマ刷新運動」が民衆の宗教性をすくい上げた。ミサの楽しさや陽気さ、また聖なるものの直接性を強調したことが、その成功につながったといえる。一方、近年の都市社会は匿名性、競争、

孤独、暴力、貧困といった問題を抱えて混沌とした状況にある。そのような中で確かな拠り所を求めようとしても社会変革に頼ることができない時代を迎えていることは、「解放の神学」の事例を挙げつつ本稿で考察してきたとおりである。人間が自らの変革のなかに拠り所を求めざるを得ないという状況の中から生まれ、成長してきたのが「カリスマ刷新運動」だといえる。しかし、同時にこのような社会状況はプロテスタント会派の発展要因でもある。プロテスタント会派とカトリック教会はエキュメニカルなつながりを保ちつつも、今後も対抗図式を深めていくことになるだろう。とはいえ、いずれも信者の内的改革という個別の救済を提供していくことに大きな違いはないであろう。

とりわけカトリック教会に限って言えば、「カリスマ刷新運動」が一般信者のイニシアティブを重視することにより、カトリック教会からの離反を生む可能性があることを危惧する神父がいる。また、サンパウロ大司教エヴァリスト・アルンス(Evaristo Arns)¹⁸の情報補佐だったフェルナンド・アルテメイヤー神父(Fernando Altemeyer)のように、「カリスマ刷新運動」を好意的に捉えながらも、マルセロ・ホッシの活動が低俗なカトリック信仰を促していると評するも者いる¹⁹。とはいうものの、「低俗」だとされる信仰形態の中に実は、民衆が望む信仰のあり方が露呈しているように思われる。マルセロ・ホッシは、その若さゆえに、カトリック教会の經典・制度的な宗教性に対峙しながら民衆の宗教性を救い上げることに成功したといえる。「カリスマ刷新運動」のメンバーは、現世利益もさることながら、日常生活での心の安らぎといった、いわゆる癒しと呼べるような個人的な宗教体験を求め

ている。信者のカトリック離れとプロテスタントの伸展という今日のブラジルの宗教状況は、民衆の救済願望にいかに応えることができるのかという切実な課題をカトリック教会に突き付けている。

付記 本稿は、日本宗教学会第65回学術大会(2006年9月18日、於 東北大学)における口頭発表「ブラジル・カトリック教会の今日的展開」をもとにして改稿したものです。

参考文献

- Carranza, Brenda. *Renovação carismática católica: origens, mudanças e tendências*, Editora Santuario, 2000.
- CNBB, *Orientações Pastorais sobre a Renovação Carismática Católica*, São Paulo, Edições Paulinas, 1994.
- Mansfield, Patti Gallagher. *Como um novo pentecostes: relato histórico e testemunhal do dramático início da renovação carismática católica*, Edições Louva-a-Deus, 1992.
- Oliveira, Pedro A. Ribeiro de et al. *Renovação carismática católica: uma análise sociológica, interpretações teológicas*, Vozes, 1978.
- Prandi, Reginaldo. *Um sopro do espírito*, Edusp, 1997
- Souza, André Ricardo de. “A renovação popularizadora católica,” *Revista de Estudos da Religião*, No.4, 2001, pp. 46-60.
- 山田政信「ブラジルにおけるネオペンテコスタリズムの伸展」『宗教研究』第78巻第3輯、日本宗教学会、2004年、71～92ページ。

¹⁸彼は1996年に大司教を辞職し、名誉大司教となった。

¹⁹Veja誌(1998年4月8日)